

介護老人保健施設しおさい

症 例 概 要 ご利用者：80代 女性 要介護2

病 名：知的障害（1級）

利用サービス：令和3年1月 ～ 現在

経 過：中学卒業後、家にこもり社会との関わりもなく長年過ごされていたが、令和2年左大腿骨頸基部骨折をきっかけに当施設を利用することとなる。人見知りの性格からなかなかなじめなかったが、通所を通し職員・他ご利用者との関りから本来の明るい性格を取り戻し第三の人生を楽しまれている症例として令和4年1月に発表。今回、妹さんへの感謝を形にする挑戦を通して新たな自信とたくさんの笑顔による生活に繋がった症例。

内 容

幼い頃、知的障害があることを理由にいじめを受けた経験から、次第に人との関わりを避け、家に閉じこもるようになったご本人。長い間、社会との関わりが少ない生活を送り、ご両親が亡くなられた後は、妹さんが生活を支えてくれました。

当施設の利用開始当初も表情は硬く、周囲との関わりも少なく、活動への参加を拒まれることが多い状態でした。私たちは無理に誘うのではなく、まず接する時間を増やし、日々の何気ない会話やふれあいを大切にしました。少しずつ穏やかな笑顔が見られるようになりました。

ある日、「ずっと面倒を見てくれた妹に感謝している。でも、一度も『ありがとう』と言えたことがない。手紙を書くのは照れくさい」と話してくださいました。その言葉を受け、妹さんへのプレゼントとして、「自分の手で感謝を形にする」キーホルダー作りに挑戦することになりました。手指の細かな動きに課題があったため、リハビリ・看護・介護が連携し、素材を選び、練習を重ねました。初めは何度も紐を落としましたが、職員は「素敵ですね」「私も欲しいです」と声をかけ、できたことを一緒に喜びました。他部署からも声援が届き、施設全体で応援する輪が広がりました。

それからご本人は利用日に自ら机に向かい、納得するまで何度もほどいては編むことを繰り返されました。思うようにいかない時も諦めず、ついにキーホルダーが完成しました。

プレゼントの日。ご本人は少し照れながら「よろしく」と妹さんに作品を差し出されました。妹さんは目頭を熱くされ、「姉からプレゼントをもらったのは人生で初めて」と大喜び。その姿を見たご本人も、誇らしげな笑顔を見せてくださいました。

一つのキーホルダーに込められた「ありがとう」は、ご本人の手から妹さんへ届き、家族の心をもう一度つながりました。そしてその挑戦は、ご本人にとって「自分にもできる」という自信となり、新たな一歩につながりました。

がりました。

今では、以前には見られなかった笑顔や、自ら何かに挑戦しようとする姿が増えています。小さな一歩は、やがて大きな自身となり、その可能性は、今もキラキラと輝き続けている症例です。

～多職種の間わり～

【看護師】

実施中の様子観察、体調管理、および精神的な支えとなる声掛けの実施。

【通所介護職員】

最適な紐選びをサポートし、一緒にキーホルダー作成に寄り添いながら適切なアドバイスを実施。

【リハビリ科】

手指の動作練習を継続的に実施。負担やストレスにならない作品作りのプロセスを専門的にアドバイス。

【栄養課】

昼食や、おやつの時間を通して声掛け実施

【連携室】

本人の作品に対する感想をフィードバックし、モチベーションと意欲の向上